

森崎和江

闘いと  
エロス



三一書

# 闘いとエロス

森崎和江

三一書房

闘いとエロス

定価 八五〇円

一九七〇年五月三十一日 第一版第一刷発行

著者 © 森崎和江 一九七〇年

発行者 竹村 一

発行所 株式会社三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九

電話東京(一九一)三二三一〜五番

振替東京八四一六〇番

郵便番号一〇一

株式会社三陽社

印刷所 山本製本所

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

森崎和江

一九二七年

朝鮮に生まれる

福岡県立女子専門学校卒業

著書

『まっくら』(理論社)

詩集『さわやかな欠如』(国文社)

『非所有の所有』(現代思潮社)

『第三の性』(三一新書)

現住所 福岡県中間市本町六

## まえがき

一九六〇年前後に九州の筑豊炭田を主たる舞台にして機関紙「サークル村」を発行し、サークル活動が展開した。またそれに引きつづいて労働運動がサークル村会員を軸にくりひろげられた。それは大正炭鉱を閉山に追いつめる大正行動隊の闘いであった。私はその両方に関連した関係上、この一連の運動を総括すべく幾度かペンを持ち、そして幾度も中断した。それは闘いを共にした多くの仲間たちとなされるべきものである。いまは分散した沢山の仲間らの顔が去来した。

筑豊は当時の情況を一変して、もはや炭坑は数えるほどしかない。かつて闘いを共にした大正行動隊の隊長は、閉山してなお残る退職者らの退職金を獲得すべく、いま地元の自民党の選挙参謀である。経済要求に局限された尖鋭性が、全情況との思想的出逢いを代用して荷うとき、個体は反動の機能をも荷わせられる。この痛みと無縁に、筑豊では労働する者の権利を具体的に闘いとり、それは不可能でもある。

けれども圧迫されつつける階層の尖鋭性は、いつまでも経済要求的部分性に限定していることはできない。閉山後の筑豊に対する認識はそのまま日本の意識構造および産業構造に対する認識に通ずる面がある。それを踏まえてこの筑豊に新しい運動が芽生えんとしている。また芽生えさんと努めてもいる。この時期にさしかかって、私は、これまでの闘いが内包しつつ越えがたかったものや、未来の運動の

予見ともいうべき質をはらんでいた点や、内部の敵ともみられる傾向等を、私は私なりにみつめながら七〇年代への手がかりにしたいと思う。

多くの仲間たちに関連した運動である。私のひとりよがりの方法がそれらの人々を傷つけることをおそれる。それだけでなく執筆の中止依頼を受けたりしている。誰もがこの変動期に自己をぶつつけながら家族を養い、またくりかえし起る挫折に堪えてもいるのである。私は筑豊炭田自体が夢幻のものとなるまえに、その特異な地域で闘われた集団やその背景を可能な限り残しておくことにしたい。そしてまた私の独善に堕すことを防ぐために、フィクションと資料による記録とを織りあわせて、後日、より多くの人々による総合的な総括が行なわれるためのちいさな手がかりとしておいて、私の果たすべき責の一部をとどめることにしたいと思う。

# 闘いとエロス／目次

まえがき

|     |           |     |
|-----|-----------|-----|
| 一章  | 眠られぬ納屋    | 7   |
| 二章  | 「サークル村」   | 33  |
| 三章  | みかん色の窓    | 67  |
| 四章  | 「無名通信」    | 87  |
| 五章  | 飢える炎      | 106 |
| 六章  | 「大正行動隊」Ⅰ  | 121 |
| 七章  | 凍みる紋章     | 155 |
| 八章  | 葦生える土地    | 176 |
| 九章  | 「大正行動隊」Ⅱ  | 200 |
| 十章  | 地の渦       | 217 |
| 十一章 | 大正鉞業退職者同盟 | 249 |
| 十二章 | 筑豊企業組合    | 274 |

十三章 雪炎  
あとがき

.....  
282

闘いとエロス



一章 眠られぬ納屋

あの日帰りの車のなかで室井腎が、

「どうだい、炭坑っていいもんだろ」といった。

「君にもなにか声がかかっていたじゃないか」

「どんなクリームつけてるのって寄ってきたのよ」

「やつら、どきもを抜かれてんだぜ。日本の労働運動史上で、炭坑に女を連れてはいったものはいやせんのだから」

顎をあげて、ほがらかな顔をしていた。

「女？」

わたしもわらった。

「女かどうかわからないわ、あたし」

「なにいつてんだい、二人も生んで」

「そんなこと！」

あたしねえ、女をみつけないのよ。あなたの奥さんや女房や細君や妻などにはならないわ。結婚って一度すればたくさんだわ。あたし、もうたんのうしたのよ。あなたとは友達になりたい」

「君はぼくの女さ。女性なるものの集約さ。しかしいま事故死でもすれば、君はさしずめぼくの情婦って新聞に書かれることになるぜ」

「情婦？ ばかみたいね」

車はがたびしした。わたしたちはその日一日中新海炭坑にいた。室井は労働組合に、わたしは炭坑主婦協議会の人々と。わたしらは谷川雁らが提案したサークル交流誌発行に賛同して、その会員獲得の工作のために、室井がかつて共産党のオルグとして出入りしていた炭坑地帯をまわっていたのである。一九五七年の春であった。同じように国鉄や教組や全通などを歩いている者らがいた。

わたしは新海駅前のちいさな宿につくなり、便所と書いた木札がぶらさがっている板戸をあけた。炭坑の主婦らに「トイレどこなの？」と尋ねかねていたのである。

あの坑夫の妻たちは、サークル交流誌の説明をしたわたしに、あんななんちゅうクリームつけよとな？ 結婚しとると？ 子はおるとな、とおもいおもいに言った。サークル？ サークルちゃんな？ ああ、そげなこつな、うちら、毎日やりよるよ。うちらは、がらくた音楽団ばつくちよるとよ。このおなごが棒ば振りよるがね、こいつは棒は振りきるが不感症たい。いやほんと。うちらがしかたを教えるばって尻のごとしちよるばい。

せんせ、サークルちゃんもの人間ば作るこつじゃろが。不感症はかたわじやろもん。せんせ、あなたの考えばこの女にいうちゃんない。

不感症といわれた女は、ばかばい、あんたら。こげえ若かせんせに恥かかしなんなよ。あんたら、と

うちゃんがみそもくそも分らんごときつかわれて上つてきて、隣んかかも、わがかかも分らんまんま  
せせくつちよるとに、きやあきやあいうてから。どうせとうちゃんな、おまえにとつちや米櫃こびつじゃろが。  
米ば買うてくる機械のごたるもんじゃろもん。そげなつに、なし、きやあきやあいえるかね。うちゃ、  
あんたらの氣持が分らんねえ、といったのだった。女らは急にさわざたてた。

そげえいったつちや、おなごでちや、したかろもん。

したかくさ。したかときや……

したかときや、なんな？ よかつがどこぞにおるな？ そげえ氣のきいたつが。

おらんでちや、うちゃ、あんたらのごと、とうちゃんて間にあわせるこた、いやだね。なあ、そげん  
じゃなかな、せんせ。間にあわせるけん、男がいっちょんばい、とせん。

わたしは彼女らに、トイレどこ？ といつていいのか、お手洗いどこ？ といつては輕蔑されるのか、  
迷っているうちに婦りの時間となつたのである。べんじょ、と発音できるようにならねば、というのが  
その日のひそかな結論であつた。

炭坑の駅前宿の便所にとびこんだわたしは反射的に走りだして室井を追つた。

「ねえ、たいへん。トイレがないの」

「あつたじゃないか、君、行つたんだろ」

「でもないのよ」

「どうして」

「どうしてかしら。ねえ、契子がまんできないの」

「どれ……」

室井はすぐに部屋を出ていったが、もどってくるなり、

「あるじゃない」

といった。

「なかったわ。あたしみたとき」

「あるある」

「うそ。あれ男性用よ」

「はやく行つといいで、いい子だから」

「でもあたしできない」

わたしの顔をみて室井は、

「早く行つといいで。だいじょうぶできるよ」

とゆつくりといった。

わたしは板戸をあけ、男性用便器がつきでているのを眺めていたがまた引きかえした。こんどは室井はふりむかない。

「ほかに旅館ないかしら」

それでも室井の背中がじっとしていたから、わたしは二階を歩きまわり、廊下のつきあたりにバケツが伏せてあったのをみつけて便所にはいった。

便器の下にそれを伏せ、いやに狭い仕切りのなかで片手を壁にあて片手で窓枠をつかむと、体重を浮かすように腕でささえてバケツに両足をのせてみた。どうにかなりそうである。わたしはスカートとパンティをぬぎ、シミーズを背と腹にまるめこむとさっきの格好をして、しっかりと腕に体重をかけてつ

めたい便器に腰をふれさせた。ギ、ギと便器が音をたて、あついかたまりが下腹で凝固し、せきをきって流れおちた。ながいあいだ放尿がつづいて、わたしはきょう一日中の体験がつまっているのだとおもった。放尿さえ自由にしえずに坑夫の妻らに、せんせ、せんせ、といわれて赤面しつづけていた。そのわたしをほうって彼女らは、たたみにごろんとねころんで、あの不感症なる女にとうちゃんをよろこばすあの手この手を実演しだした。わたしが炭坑を訪れたのはこれが二日目であった。女らは嬌声を放ちつづころげまわった。

なんじゃい、そげな。うちのほうがうんとうまか。

不感症と攻撃されていた女は突如、ころがっている一人にとびかかった。

ひゃあつ、離しい！　うち、けがするばい。ほら、はよ、せんかい。

あんたのとうちゃんよりよからうが。ほら、はよせんかい。ほらほら。

きやあ、こんひとは、いやばい。うちゃ、あんたはいらん。

集っていた女らは、げらげらわらいながら二人をすみへ押しやった。

ちった知っちゃおるばいの。くちぐちにいう。知らんでどげえする。うちゃ十六んときから男どま、菅めるしこ知つちよるとばい。うちゃね、とうちゃんば馬鹿にして抱くごたるこた、しょうごたなか。米櫃大事に抱いて、へらへらして、きいきいいうて、そつでにぎりめしこしらえて、穴んなかさへ放り出して……　そつでおまえうれしかつか。やいこら、すべた。おまえ、こげえされてうれしかつじやろが。よう肥えちよるのう、おまえんとこのばかがへらへらするはずじゃ、——ひゃあ、死ぬ死ぬ。

ぱしりと太股を打った。

ひゃあ、たまがった。ばってん、ここんどこに吸いついたときや、きいんち、あそこにきたばい。

シカちゃんとはばれていた女は起きあがり、あけっぱなしのワンピースの腕をあげて、上膊の内側を撫でた。目をきらきらさせて、ほんなこつばい、うちゃ、知らじやった、と嘆息をついた。

女たちはくちぐちに訴えだした。

ねえ、せんせ。男はなし、あげえ精がのうなるとかね。せんせ、穴んなかさへ下りてみたこつあるかね。うちゃおもうがね、穴んなかさへ下りて仕事したもんは、穴がすかんごとなるのところがうかね。

誰も笑わなかった。

すかんごとなるとじやなかばい。どだい人間は助平じやが。その助平根性がぴりともせんごとなつちよるよ。土亀ん首じやが、坑夫は。うちゃ、とうちゃんばはねのけた時だけ、とうちゃんと夫婦ぢゅう気がするねえ。そのほかんときは？ そのほかんときや、あいつは、米櫃じや。米櫃がおなごにおじけふるつとるんとちがうかね。ああ、こわがच्चよるばい。そげんばいのう。いや、こわがच्चよるちゅうこたないが、おなごにひけ目ば持つちよるなあ。な、そげんばい、せんせ。

先生はやめてね。やつとわたしはいう。あれらの長い話がわたしの下腹に凝っていたのである。腕がなえて、便器がギ、ギ、ギと音をたてた。

ほんなことばい、契子さん。あんたも奥さんならちつとは分ろう？ 炭坑の男はな、穴ん中で石炭ほるだけばい。うちらは地のうえてサークルやなんかしようが。男は地の上におるかあちゃんにひけ目ば持つちよるばい。口でいわんだけ。酒のんであばれちよるがね、ちんぼは水虫に喰いちらかされたことなつて役にやたたんね。うちゃ、抱かれたくていいよるとばい。男ばけいべつしていいよるんとちがうけんね。抱かれないちゅうても、煙草ばふかすごたるふりに男と寝たいちゅうんとちがうばい。うちゃ、男ひでりじやなかけんね。男なんか、ヤマにや、掃いて捨つるほどおるばい。ばってん、じいんとくる

男はおらんねえ。

ああ、おらんおらん。シカちゃんも下条という編物ずきな女も相槌をうった。

いや、ほんと、どいつでん、かあちゃんになんやらひけ目もつちよるよ。うちん人でん、ぴんと立ちきらん。どがんと太うもならんばい。口ばかりえらそういうてから。シカちゃんあんたともな。ああ、あげん唐芋のしり毛のごたるもん、足の指にはさんでねじ切っちゃうごとなるねえ。炭労、炭労ちゅうてふとか面しちよるがね、炭労のほんとの力は、うちらがいちばんよう知っちゃよるよ、なあ。炭労も、なごうないばい。炭労のあれは、どぶづけのきゅうりじゃが。うちらは後家ばい。炭労後家、炭労後家。ああ、あ、うちら、宝のもちぐされじゃが。どげえかならんかのう。

わたしは女性用便器のない宿で、きょう一日の坑夫の妻との疲れを排泄しながら、あれら妻たちを思う力もなく、なぜここには女のトイレないのかしらと思っていた。それでもながい放尿が終るにつれてどこやら図太くなるものがはっきりしてくる腹に芽生えてくるようであった。

服をととのえて部屋にかえるとき、わたしは顔じゅうに笑いが浮いた。室井が立ってむかえてくれた。笑っていた。

「おりこう」

「なんでもなかった」

わたしはべたりと彼のそばに坐った。

「ほんとにできた？」

「なんでもなかったわ」

彼がにやにやした。

「どうやってした」

「廊下にバケツがあつたの」

「それにしたの」

「まさか」

わたしは説明した。

「だろうと思つた」

室井がまた笑つた。

「君はね、あれができんとだめだよ。にほんの女は立小便が本筋なんだから」といった。

「立小便ができなきゃ、女の仲間にいれてくれんよ。君は女を組織するならあれがやれなきゃ」

ふいにわたしの笑いがこわばつた。くらい海面がひろがり、体が浮いた。頭のなかがいそがいそしくまわり、どこかで、知つてゐるわよ、と答えようとしていた。たしかに何か知つてゐるにちがいない、たとえわたしとわたしの母とが立つておしっこができなくなつて…… 何かの感覚が残つてゐるにちがいない…… わたしのなかで朝鮮が低い静かな音を揺すつてゐる。室井がわたしをちらとみて、

「しかし君ならやれるさ。とにかく炭坑町の便所をつかえたんだから元気がいいよ。さ、うまいもん食おう。なん食べる？ なんがいい？」

といった。

「うまいもんなんてあるはずないがね。しかし炭坑を知るつてことは君にはきつと救いになるよ」